

えん
そく

九月二十四日

文四、百草へ

一行十名が新宿の停車場に齋藤先生をお迎えしたのは午前七時半調布でのりかへした時にはもう本當の雨ふりになつてゐた。府中の停留場は大國魂神社の並木のすぐ横に在る。先づ神社に詣でてから先生の御霊力で一時社務所に休む事にした。雨の小止みを見計つて此所を出發。皆で雨具さして油紙を求めて背にかけた。これやこの行くも歸るも油紙知るも知らぬも府中町、さやじつたり、まるで西行の様だが、ペルリ浦實に上陸の光景なごさ笑ひさだめき乍ら、痛快がつては居たもの、先生は柄の太い番傘をさしになるし、町の人達がしきりに笑つてゐたのも無理がない程おかしかつたらう。兩側の川水もどしどし増して來るので、自分達が目指す百草迄は二町餘あるので、さても六ヶしいと誰かが云ひ出したのが始りて、さうさう又府中まで引返してしまつた、そして停車場前で馬車二臺に分乘して立川にゆく。馬車の雨除けの中で切すしを出した、その時のにしいかつた事、さてもあの仲間でなくては物の味は語るに足りない。一通りすむと次に靴の水はき。立川から玉川に出て、ふ、から百草にゆく、百草では藪を掘らす積であつたが駄目だつた。歸りの大宮の渡しは蓋し本日中の一番の場面だつたらう。水量の増した川の水は、あたりと同じ灰色にゆつたりと流れて、渡し舟は舟べり

日は實に美しく輝いた。

朝もやの町を歩いて七時三十分上野驛に集合した一同は、引率の先生と車に入ると間もなく朝もやの中を出發した。

汽車はかなりのゆる／＼さはする。輝かしい朝日がてつてくるにつれて空の藍が愈々こくなつて雨後のみづみづさが一同の心を益々さばやかにさせる。

「富士が見える。不二が誰かが叫ぶと先生も生徒も左側のまごによつてさこのぞく。桑畑のはてに牙彫の様な其姿を一寸垣間みる内に汽車は浦和につく。

「兵隊さんがある。」など、珍らしげにいふ人や、それを笑ふ人やそれ／＼にぎはしい。

寶登山線になつてから汽車の歩みは益々のろくて、遂にどこかの驛で止まつてしまつた。給水に手間ごるのだと思つてゐたが餘りおそいで西村先生等について視察に出かけるものや、列車の中を訪問してまはるものやが出来る。關根先生や下村先生のグループからも遂に嘆聲がもれる。三十分以上も停車してやがて又ゴト／＼と動き出す。桑畑の中をだん／＼と兩方にせまる山の秋色をめで乍ら進む内に、水音をき、水を見、水にそふて、暫らくしてやうやく寶登山驛につく。正に午前十一時。

直に長生館に憩ふて晝餐を認め、夫から思ひ／＼に河原に出る。長瀬の景色は決して廣くはない。狭くて小さい。然し珍らしい。岩の白、水の青、そして紅葉の紅、矢張日本畫らしい趣だと思ふ。岩に踞して寫生をする家事科の人や、ハンマーふり上げる理科の人々の中を、我等文科のものは悠々自適といつた様に逍遙する。つい

迄沈む。渡し守がしゆうつ／＼と棹をさすさ舟がすうと滑る。

元の電車で新宿についたのは九時半、舎に歸つたのが十時すぎ。入學以來一番楽しい旅行だつたと云つてた人があつた。(Y)

十月二十三日

文二

細田先生がお連れ下さいまして調布にまゐりました。午前中は可なり強い雨に多摩河原の東屋に閉ぢこめられましたが、午後からはすつきりした空に晴れました。濡れた小石にひや／＼かに秋の陽がさして、薄の蔭にはこぼろぎか鳴いて居ります。靜かな心持で一日を暮しました。

十一月二十五日

淺野様の御庭の紅葉の下に日曜の午後を暮しました。午後の陽を受けて錦のやうに輝きながらも絶えずはら／＼と葉が落ちて來ます。下田先生の後について黙つたま、晩秋の中を歩きました。靜かな淋しい音が足もさから湧いて來ます。夕霧の奥に夢のやうな灯の見える頃、「い、日だつた、さひなから歸りました。

長瀨行 (郊遊會)

理科の人たちにはきいては羨ましがつてゐた秩父赤壁にいよ／＼秋を探る事に定まつてから覺束ない天氣が續いた。殊にその前夜はかなりの大降りであつた。然しその夕方「明日晴れ」といふ土屋先生の保険付の天氣豫報が揭示されたので、寄宿舎は明るい笑聲にみたされて、食堂ではおすしつくりり之餘念もなかつた。案の定當日は好晴で思ひきつて樂觀して居た人にも、内々心配してゐた人にもその朝て來た中村があちこちで寫眞をさる。水を切るさいつて石をほふる群や、岩の上で柿をたべてゐた群がひそかにレンズに納められた。時間がながつたので大抵の人々が上流の親鼻橋まで遡つてより以上の眺めを得る事の出来なかつたのは残念であつたが、木かげをあさつてぐみや、りんどうや、大分美しい秋の家づゑが出來たので、二時二十分さぬやなぎの薄らあかい紅葉を彩られた岩に別れて、停車場に引上げた。列車の中で校長先生の御土産長瀬名物の柿をいた

やがてコスモスの咲き亂れた停車場を後にけふの旅を終つてはやわれらのつた汽車は歸途につくのであつた。次第に遠ざかつてゆく秩父の山々や、瀬の音に暫し名残を惜しむだ一同は、今度は思ひ思ひの遊びが盛になる。歌ふもの、語るもの、先生をさりまいて遊ぶもの、實ににぎやかである。

齋藤先生の大きい御聲それにつ、く文四の人々の笑ひ聲が次の車室まで響いて來る。西村先生を取かこむ文二のグループではジャンケンやら後取りやらが大にはつむで青木先生、高橋先生を笑殺しやうさする。

文一は垣内先生をすつかりさりまいて、追分を、寮歌をさおれだりしてゐる。細田先生の御筆が例のやうに繪葉書にはいる。關根先生のゆるやかな御はなしがはつむ。「熊谷、熊谷」といふ聲にあはて、御家寶を買ふ一群のさわぎがまたこる。快よいま／＼めきをのせたわれらの汽車は夕もやの中をはしりつ、けて、やがて灯うつ／＼と夜の都につく。

星の降る様な宵、しみ／＼と嬉し心を抱いて一同は一日の旅を祝福しあつた。